

赤ちゃんの視線の先にあるもの ● 手伸ばしは視覚発達のサイン?

赤ちゃんの目にはどんな世界が映っているのかと考えることはありませんか? 赤ちゃんは味覚や聴覚などに比べて視覚能力が未熟なまま生まれてきます。物の色や形を区別したり、顔を認識したりする能力は、生後1年の間に急激に発達することがわかってきています。実はふだんの生活の中でも、赤ちゃんの行動を観察していると、視覚能力の発達のサインに出会うことができます。

生後4ヶ月頃になると、赤ちゃんはさまざまな物に手を伸ばしてつかむようになります。何でも口に入れてしまうのでハラハラしますが、この行動は物



の距離を区別する能力のサインなのです。大人は物の形や距離を知るために、左目と右目に映る像の「ずれ」を手がかりにしています。

3Dテレビや3Dの映画からリアルな立体感を感じるときもこの情報が使われています。生まれたばかりの赤ちゃんにはまだ大人のような能力は備わっておらず、生後4ヶ月頃からは、視覚像のずれを手がかりにするようになっていわれています。それとほぼ同時に運動能力も発達して、手を自分の意思通りに動かせるようになります。赤ちゃんの目の前に2つの物を違う距離になるように置いてみましょう。赤ちゃんは近いほうの物に頻りに手を伸ばして触れようとするでしょう。物の距離をしっかりと区別して手を伸ばしている証拠です。

赤ちゃんの視線の先にあるものを追いかけてみると、生まれたときには未熟だった能力が段階を経て発達していく様子がわかるかもしれません。

お料理レシピ ● ご飯好きな子、元気な子!



「いただきます」



最近、子どもや若者の米離れが進んでいます。食生活の欧米化は肥満をはじめ、いろいろな生活習慣病を引き起こします。子どもの時から、糖質だけでなく、タンパク質やビタミン、ミネラルが豊富なご飯を中心とした日本型の食事の習慣をつけておくことが、将来の健康にとって、とても大切です。滋賀県は米どころ。地産地消や食料自給率向上という面からもご飯をしっかり食べたいですね。今回は、暑い夏の疲れを癒しておいしく食べられる簡単なお飯レシピを紹介します。

管理栄養士でもある岡本秀己さん(滋賀県立大学人間文化学部)と岡本ゼミの学生のみなさんに考えていただきました。

サッパリ、うなぎご飯

- 材料 ●●● 4人分
- ごはん 600g
 - うなぎかば焼き 1/2枚 (酒 少々)
 - 梅干し 1個
 - 青じそ 4枚
 - きゅうり 1/2本



- 作り方 ●●●
- ①かば焼きは食べやすい大きさに切り、酒をふりかけ、ラップをしてレンジで温める。
 - ②青じそは千切り、きゅうりは薄い小口切り、梅干しは荒くきざむ。
 - ③ご飯に①、②を軽くまぜ合わせ、器に盛る。

すり鉢1つでできる! 夏にぴったり冷汁

- 材料 ●●● 6人分
- アジの干物 大1尾
 - ごま 大さじ3
 - 味噌 大さじ4
 - きゅうり 1本
 - 青じそ 8枚
 - みょうが 2個
 - だし汁 600ml
 - ごはん 適宜



- 作り方 ●●●
- ①アジの干物はこんがり焼いて皮と骨を取りのぞき、身だけにする。
 - ②きゅうりとみょうがは薄い小口切りに、青じそは千切りにする。
 - ③すり鉢に炒ったごまを入れ、半ずりくらいにし、そこに①のアジ、味噌を加えてすりつぶす。
 - ④③にだし汁を加えて伸ばし、きゅうり、青じそ、みょうがを加え、冷蔵庫で冷やす。
 - ⑤温かいご飯に冷汁をかけて、好みで青じそやみょうがを盛りつける。

うみかぜだより 第10号 2010.8.20



こんにちは! 「うみかぜだより」です♪♪♪

残暑お見舞い申し上げます。本号も子育て、子育てにかかわる話題を元気にお届けいたします。今年の猛暑、あるいは酷暑を、皆さまどのように過ごされたでしょうか。

さて、滋賀県立大学では「担任」という名で学生生活の諸々について相談に応じる役割の教員が決められています。なかでも「就職支援」は大きなテーマで、順調に就職活動が進むよう、一層の努力をするように、との指示が大学当局から3~4回生の担任に頻りに届きます。ゼミの時間で近況を交流する中に就活の話題も含めたり、進路についての考えを紹介しあったりなど心がけはするものの、内定獲得に向けてはささやかな「後方支援」でしかありません。

そこで、ささやかという点では変わりませんが、「じんかん就活応援フォーラム2010」(「じんかん」というのは、筆者らの所属する人間文化学部「人間関係学科」のことです)と称して、学科のOBを招いた懇談会を開くことにしました。この夏の暑い日々、面接に向かう4回生を少しでも励ますことができれば、また、秋以降本格化する3回生の就活へのとりくみに少しでも参考してもらえれば、という思いから、社会人として自分の道を切り拓きつつある先輩を招き、近況やこれまでの歩み、就職や仕事についての考え方を話してもらうことにしたのでした。

先日開催した第1回は、「らーめんにっこう」店主の西川浩司さんに話題提供をお願いしました。テーマは「夢を語ろう」です。学科6期生の28歳。斬新なヘアスタイルで登場し、話題は多岐にわたりましたが、自身の信念として強調され

ていたのは、「自分が何をしたいか、何が好きか」にこだわることで、何かが見つかるはずで、それを手がかりにすると、さまざまに行動を起こし、活動を広げていける。お店への採用面接でも、志願者には、この就職が自分自身にとってなぜ必要なのかということと話してほしいそうです。もちろん、会社のためにがんばるという姿勢や、他者との協調性、コミュニケーション能力をこそ重視する採用方針のところも多いでしょう。参加者からは、自分のしたいこと、好きなことがどうしても見つからない人はどうしたらよいか、という質問もでました。彼の答えは、「そのような時期があってもよいと思う。ただ、そのような時期に敢えて就活する意義があるだろうか...」

マンガが好きだった、ラーメンが好きだった、本学で取得した高校の教員免許に加えて卒業後には小学校の教員免許も他大学の通信課程で取得した。いずれは、教師になりたい思いもある。「いろんな経験を積んだ人が学校教育に携わるべきではないか...」

在学時代からその人柄は知っていましたが、学生時代のアルバイトや海外バックパッカー経験など、初めて聞く内容が多くありました。さらに、卒業後のラーメン修行、独立、結婚などを経て、彼は自分自身を発見し続けているようです。見つけた自分を大切に、見つけた自分によって社会に繋がってこそ新しい世界を拓くことができる、当日参加してくれた学生に届けられた先輩からのメッセージでした。

第1回 うみかぜセミナー 9月25日(土)

おしらせ
滋賀県立大学子育て応援プロジェクトでは、「発達障がいと歩む」をテーマに、本年度も「うみかぜセミナー」(全4回)を開催いたします。第1回は、9月25日(土)13:30~15:30、県立大学交流センター2階研修室で、「あした天気になる? 発達障がいのある人たちの生活記録」というドキュメンタリー作品を鑑賞し、意見交換を行います。事前登録不要、参加無料です。皆さま、お誘いあわせてご来場ください!

主催: 滋賀県立大学人間文化学部 滋賀県立大学子どもの未来応援プロジェクト/後援: 日本臨床発達心理学会関西支部 問合せ先: 滋賀県立大学子どもの未来応援プロジェクト tel.0749-28-8444 fax.0749-28-8559

うみかぜだより 第10号

発行 子育て応援ラボ「うみかぜ」(竹下秀子研究室内) 彦根市八坂町2500 滋賀県立大学人間文化学部 tel.090-7343-2405 fax.0749-26-7235
編集 伊村知子・上野有理・竹下秀子・広田幸子・丸澤由美子

人間らしく生きていく力とは？(2)

——まなざしのやりとり——



前は、人間らしく生きていくときに大切な「自助」と「共助」について考えてみました。これらは親や周りのおとなとの基本的信頼関係を土台にして、身近な人の行動をまねし、ことばの発達も力となって育っていきます。では、素朴な疑問ですが、人はどのようにして信頼関係を築く、つまり、その人を好きになるのでしょうか？

本来、人は「自分の方を向いている目を好む」という特性を持っています。これはどういうことを意味するかというと、自分にまなざしを向けてくれる人を好むということです。親や周りのおとなが自分にどのようなまなざしを向けているか、また、子どもがかれらをどのようにまなざすのか、このまなざしの相互作用(応答)がお互いの信頼関係に大きな影響を与えるのです。



「まなざし」とはことばをかえて言えば「肯定的な注目を与える」こと。子どもの方に顔も身体も向け、子どもの目を見て笑顔で肯定的なことばをかけてやりましょう。「～ちゃん、愛しているよ」「～ちゃん、大好きだよ」「生まれてきてくれてありがとう」は最大の肯定的注目であり、声かけでしょう。また、子どもが親やまわりのおとなにまなざしを向けたときに、「どうしたの?」「一緒に遊んでほしいの?」「～してくれてありがとう」「～できたね」……などそのときに応じた声かけをしながら、まなざしを返してあげるとよいでしょう。

このように、人は「まなざし(肯定的な注目)」を向けてくれる相手を好きになります。そして、その人が物や他者に対してどのような行動をするのかを見ていて、そのやり方をまねして自分に取り入れていくのです。



ふれあい遊び

おほしさま 作詞作曲:不明

まげて せのびして
おほしさまを つかもう
まげて せのびして
おほしさまを つかも〜う
キラ キラ キラ キラ キラ



身体を伸ばしたり、曲げたりする遊びです。あかちゃんときは、「まげて」でお母さんがお子さんを抱っこしながらかがんで小さく小さくなります。「せのびして」でお子さんを「たかいたかい」の要領で高く抱きあげます。さらに、「おほしさまを」でかがみ、「つかもう」で伸びます。「キラキラ〜」では手をクルクル星の瞬きのようにキラキラさせます。伸びたり、かがんだりを繰り返すだけではありますが、お子さんはその高低差に大喜びです。「キャハイ」と声を出して笑ったり、「もう1回!」と要求するかのようニコニコ笑いながら、お母さんをジッと見つめて期待に目を輝かせます。

少し大きくなると、お母さんにしてもらうだけではなく、「一緒にしたい!」とお母さんの手をとって、一緒にかがんだり、大きく伸びをしたりします。「自分で!」の時期には、お母さんに歌ってもらいながら、子どもだけで身体を伸ばしたり、かがめたりします。

爪先立ちをしながら「大きい?大きいでしょ!!」と嬉しそうに大きくなった自分を伝える子。「小さくて、どこにいるかわからない?」と小さく小さくかがんで、かくれんぼしているような子。大きくなった自分を小さくなった自分を「山みたいに大きい?」「石みたいに小さい?」と楽しんで

お祭りなどで夜に外へ出かけることも多くなる季節。お子さんと空を眺めながら、一緒に星をつかんでみませんか?



世界の子育て ——ブラジル——

2010 FIFAワールドカップでは、残念ながら準々決勝で敗退したサッカー大国のブラジル。南米大陸の約半分を占める国土には、広大なアマゾン川が流れる熱帯雨林も含まれます。かつては日本から多くの移民を受け入れ、現在はその人々の子孫である日系ブラジル人が日本の各地で働いています。滋賀県には、とりわけ多くの人々が暮らしています。今回は、県内の小中学校で日本語指導員として勤務されている平田輝子さんに、ブラジル人の教え子との交流の一端をご紹介します。

日本語指導を通じてこれまで多くの外国籍の子どもと出会いました。慣れぬ異国での暮らしは親子ともにさまざまな困難があり、子どもたちの学校生活も順調にいかない場合が多くあります。少しでも打ち解けて心を許しあう関係をつくりつつ、日本語学習に向かい合いたいという思いから、授業の時間以外での交流にも積極的にとりくんできました。そのなかにブラジル人の子どもから提案された「ピーパーづくり」がありました。

ピーパーとは、凧のことです。竹が必要とあるので、知り合いから一本手に入れて学校に持っていき、なだでボンボンと縦に割って、あつという間に竹ひごを作っていきます。日本の子どもにとって竹ひごと言えば、今や「ホームセンターで買うもの」でしょうが、彼らにとっては、竹から作るものの方でした。

次に色紙を配色や形を考えながらパッチワークのように貼り合わせてデザインして本体を作っていきますが、はさみなどは使いません。そろえた材料の中には凧を飛ばすための糸があるので、糸で器用に切っていきます。本体が重くなり過ぎないようにのりしろが大きくならないように、糊も使わずにのりしろが丈夫に仕上がります。そして竹ひごがバランスよくつりあうように、糸でくりつけながら骨組みをつくり出します。その骨組みにパッチワークでデザインされた紙をバランスを崩さないように貼りつけます。

凧の足はビニール袋を細長く切ったものを、長い糸に一センチ間隔ぐらいで結びつけていきます。それをもつれないように気をつけて本体に取りつけます。最後に、飛ばすための糸を左右の釣り合いを考えてくりつけたらピーパーのできあがりです。

風のある日、グラウンドに出て、風の強さ、向き、そのタイミングを見計らって、三人組で声を掛け合って揚げました。一人はピーパーを持ち、一人は「走れ」の声を聞いたら糸を持って走っていきます。

飛んだ! みるみる高く上がっていきます。空に小さく、最後には点ぐらいいしか見えません。こんなに高く上がる凧を初めて見ました。

